

# 知 識 探 訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### 非マレーシア語映画が新たな歴史

戸加里康子  
(一橋大学大学院社会学研究科・博士課程)

2014 年はマレーシア映画の歴史に新たな一步を刻む年になった。1 月に公開された「The Journey (一路有你)」が、3 年ぶりに歴代興行収入の記録を塗り替えたのだ。これまでの興行収入第 1 位は 11 年に公開された「K L Gangster」の 1,174 万リンギ(約 4 億 1,000 万円)だったが、それを大きく引き離す 1,717 万リンギのチケット売り上げを達成した。興行収入自体はいずれ塗り替えられるもので驚くことでもないが、特筆すべきは「The Journey」がマレーシア語ではなく中国語の映画だったことだ。

「マレーシア映画」における中国語映画の存在感が増している。FINAS (マレーシア映画振興公社) がホームページ < <http://www.finans.gov.my> > で公表しているデータによると、12 年に公開された 73 本の「マレーシア映画」のうちマンダリン(華語)の映画は 6 本、広東語の映画は 2 本、13 年は 71 本のうちマンダリンの映画が 6 本、広東語の映画が 1 本。今年 11 月 14 日までに 67 本が公開され、そのうちマンダリンの映画が 15 本、広東語の映画が 3 本となっている(ちなみに「The Journey」は広東語の映画に分類されているが、実際にはマンダリンや福建語、英語、マレーシア語など様々な言葉が話されている)。金額でみると、14 年の全体の売り上げ 6,721 万リンギのうち、マンダリンと広東語の映画の合計は 3,728 万リンギと、半分を超えている。

「Dewan Masyarakat」4 月号の記事によると、商業公開される中国語の映画の増加にはいくつかの理由があるという。一つはデジタル技術の普及。これまで非マレーシア語の映画は、デジタル形式で撮影されることが多かった。デジタル技術の進展は、少ないコストでの映画製作を可能にし、数多くのインディーズ作品が製作されるようになった。2000 年代の初めには、こうした映画の多くが海外の映画祭に招待されたり、賞を獲得し、マレーシア映画の新潮流などと呼ばれていた。しかし、記事によると、国内の映画館の多くはデジタル形式での上映が難しかったため、国内での上映機会は限られていたという(本当にそれだけが理由だったのかは定かではないが)、デジタル映写機の普及により、そうした状況が変わりつつあるのだそう。

そしてそれに伴い、十分な資金を持った企業やプロ

デューサーが、非マレーシア語の映画の製作に関わるようになってきた。「The Journey」の製作会社も、アストロの子会社アストロ・ショウである。

だが、最も大きい要因はやはり、非マレーシア語映画が「マレーシア映画」と認められるようになったことだろう。以前「マレーシア映画」は会話の 60% 以上にマレーシア語が使われるものに限られていた。しかし 11 年に規則が変更され、全体の 50% 以上がマレーシアで製作され、権利の 51% をマレーシア人が持つものであれば、使用されている言語にかかわらず「マレーシア映画」と認められることになった。

「マレーシア映画」と認められることによって、非マレーシア語の映画も「上映義務スキーム」と娯楽税の還付金を受け取ることができるようになった。上映義務スキーム(Skim Wajib Tayang)は、承認を受けた映画を、観客の多少にかかわらず、映画館側は少なくとも 2 週間上映しなければいけないと定めた規則で、シネプレックスでは最も大きいスクリーンを割り当てなければいけないことになっている(観客数が一定数より少なければ、話し合いの上、小さいスクリーンに変更することもできる)。娯楽税の還付金は、映画のチケット代に含まれている税金から一定の割合を製作者に還付するというものである。

このスキームは中国語の映画だけでなく、タミル語や英語の映画にも適用され、タミル語の映画は 12 年には 2 本、13 年に 6 本、14 年はこれまでに 7 本が公開されている。8 月に公開された「Maindhan」は、マレーシア・タミル映画の興行成績記録を塗り替えたという。

今後ますます非マレーシア語映画の製作が盛んになり、それがマレーシア語の映画にもよい刺激を与えて、ジャンルの異なる様々な「マレーシア映画」を観ることができるようになるかもしれない。それを期待したい。

#### < 筆者紹介 >

1969 年名古屋生まれ。一橋大学大学院社会学研究科(地球社会研究専攻)博士後期課程在籍。マレーシア語通訳・翻訳・講師。専門はマレーシア地域研究(特にクランタンの芸能について)。